

2024年 3月 30日

立教大学国際学術研究交流制度  
2023年度「派遣研究員」報告書

1. 派遣概要

所属・職	異文化コミュニケーション学部・教授
氏名	細井 尚子
派遣機関名	Department of Drama and Theatre, National Taiwan University 所在国：台湾
研究テーマ	台湾の舞台性大衆娯楽における近代化・グローバル化現象の連続性と断絶
派遣期間	2024年2月16日～2024年3月17日（31日間）
研究経費	598,910円

2. 派遣期間中の活動

離日および帰国日を含め、派遣期間中の活動を記入してください。全日程（毎日）記載する必要はありません。

活動内容記入例）〇〇に関する調査、〇〇氏と研究討議、共同研究、講演、視察等

年月日	活動内容
2024/2/16	離日
2/17—3/15	協力者・関係者挨拶及び情報交換、テーマ関連資料収集： 台湾大学、台北芸術大学、清華大学、台北木偶劇団等上演団体
2/23	国際書展：「食煙無在食身份 従『林搏秋全集』的庶民生活場景談 起」（黄沙龍）参加・講師陣（石碗舜・盛浩偉）と交流
2/24	「狂言工作坊」（開楽亭凡笑、泉慎也他、於台湾大学）参加
2/28	歌仔戲演者洪明雪氏インタビュー（台北芸術大学簡秀珍先生と）
3/1・3/8	台北芸術大学伝統音楽系で講義。学部生、院生、教員と交流
3/15	清華大学講演「戲院内外的身體與空間經驗・日本語中國的案例」
3/16	北京外国語大学「“古典文学与大众文化”工作坊」座谈会参加
2/23-3/16	【観劇・毎回研究者、関係者と意見交換・交流】「狂言実験場」（草搞 場、2/23）、「白賊燈猴天借膽」（台北木偶劇団、2/24）、「Michael Keegan-Dolan / Teac Daṁsa: MÁM」（2024TIFA、2/25）、「白色説書 人」（同党劇団、3/8）、「白蛇伝」（国光劇団・京劇、3/9）、「盜甲」他 （国光劇団・昆曲、3/15）、「春風闌堂」（国光劇団・京劇、3/16）
2024/3/17	帰国

### 3. 研究・交流状況および成果

上記に記載した活動について、具体的な研究・交流の内容および成果、今後の研究の展望、本学と派遣機関との研究交流にかかる成果、展望等を記入してください。

#### 【研究・交流の内容および成果】

日本の上演文化における近代化は「一元化」・「西洋化」をキーワードに設定することができ、また、グローバル化による影響は、様々な事象を多元化、近代化による評価基準の修正、芸態と客層の関係性の変化などに収斂できるが、台湾の上演文化はより複雑である。近代化・グローバル化をキーワードとして共同研究を重ねてきたが、日本・台湾間だけでなく、台湾の研究者間でも、この2つの語意にはゆらぎがある。演劇も含む文化は社会・政治と密接にかかわるが、台湾は台湾島史と政治史が一体化しない。そのため、近代と現代の区分、舞台性大衆娯楽のどのような事象を以てグローバル化とするかについても明確な共通概念はないように思われる。今回はまずあらためて台湾の舞台性大衆娯楽研究の開拓者に位置づけられる邱坤良氏をはじめ、当該分野の研究を牽引する研究者に台湾の演劇界の近代化の時期、その理由を確認する作業を行った結果、各氏の見解は、1895年以降（日本統治時代の開始・インフラ整備、教育）、1905年以降・1910年代（近代劇場の開場）、1920年代（新劇の形成・誕生）、1980年代（70年代の国際面、新しい演劇界の動きを基にする展開）、1987年（戒厳令解除・表現の自由）など約1世紀にまたがることが明確になった。こうした特性をもつ台湾と日本の舞台性大衆娯楽の近代化以前と近代化、グローバル化との連続と断絶について比較研究を行うため、事象が比較的明確に出る観劇行為、具体的には観劇行為中の観客がパーソナルな身体（個人）か、プライベートな身体（「公」的環境を前提とする「私」人）かに焦点を絞って資料収集を行った。約150年間の実際の観客の状況を理解するため、劇場構造に関する資料、往時の新聞記事・日記の関連部署の資料の補充、すでに亡くなられた演者の手記などを収集、インタビューは台北芸術大学簡秀珍教授のご協力を得て、芸歴70年を超える歌仔戯の洪明雪氏（1936年生）に幼少期から舞台上で実見してきた観客席での観客の状況、ファンの行動などを伺った。その結果、京劇・歌仔戯等劇種に関わらず、屋外で演じる外台戯はほぼ断絶がなく、屋内で演じる内台戯は1970年代後半から徐々に、80年代にはほぼ完全に観客がプライベートな身体に変わったことが分かった。また、台湾の特殊性から、日本の近代化のキーワードを適用すると、台湾は一貫してグローバル化の状況にあったのではないかという想定も可能であり、その視点から台湾の上演文化を読み直すことは、グローバル化時代の上演文化研究において、何らかのヒントを得られるのではないかという感触も得た。

#### 【今後の研究の展望】

近年、東アジア文化圏の枠組の中で、日本本土・沖縄・中国・台湾・韓国の上演文化について考えてきたが、歴史的に日本・沖縄と重なる面が多い台湾の視点から読み直すことは、大きな気づきと発見に繋がる。今回得た成果を基に、「他」の果実の受容とその「自」化について、演じる内容ではなく、見せ方・受け取り方に焦点を絞ることで比較研究を進めたい。

#### 【本学と派遣機関との研究交流にかかる成果、展望等】

受け入れ先の台湾大学文學院戲劇系との研究交流は、22年度に細井が研究休暇を認め頂き、客員教授として半期着任し、研究・教育活動を行ったことにより、それ以前よりも格段に密接な関係性を得たが、派遣期間中は研究交流に一本化できたため、膨大な図書館所蔵資料を活用する時間を確保できた。資料・設備面で台湾屈指の大学であり、研究者交流のみならず、将来的には院生の研究交流の機会も設けられるのではと考えている。



歌仔戲名優洪雪明氏インタビュー（台北芸術大学簡秀珍教授と・24/2/28 於洪雪明氏ご自宅）



講演「劇院内外的身體與空間經驗-日本語中國的案例」（24/3/15 於台湾・国立清華大学）